

非母語話者日本語教師のビリーフの変化
-教師の役割に注目して-

Changes in Non-native Japanese Teachers' Beliefs
—Focus on the Role of Teachers—

久保田美子 (目白大学)
Yoshiko Kubota (Mejiro University)
yo.kubota@mejiro.ac.jp

Abstract

A language teacher's beliefs play an important role in the thoughts and actions that go into language teaching. This paper reviews previous research on the beliefs of non-native Japanese teachers, focusing on changes in beliefs and the role of teachers, and contemplates what language teachers' beliefs should be like. The non-native Japanese teachers' experience as a learner changes with the times, and that change influences teachers' beliefs. New curriculums and new educational concepts also have some effect on teachers' beliefs. ICT (Information and Communication Technology) adoption has increased the amount of knowledge that learners have about Japan and Japanese. That fact also affects beliefs concerning the role of the teachers. Beliefs can't change easily. But teachers' beliefs can change by changing their own perspective and way of thinking. Language teachers need to have the ability to look back on themselves to change their perspective and way of thinking, and they will have flexible beliefs as a result.

Keywords: Non-native Japanese teachers, experience as a learner, new educational concepts, ICT (Information and Communication Technology), perspective and way of thinking

1. はじめに

言語教師のビリーフ¹は、言語教授の思考と行動の面で重要な役割を果たす。また、学習者のビリーフとの異同、所属機関や国の方針との関係性などは、学習の効果に大きな影響を与える。2000年代に入り、経済協力開発機構(OECD)の「キーコンピテンシー(Key Competencies)」や、「21世紀型スキル(21st Century Skills)」といった新たな能力概念が世界各国の教育課程やガイドラインに組みこまれ始めている。その影響は日本語教育の分野にも及び²、教師も学習者も意識の変革が求められている。そのような状況の中で、世界の日本語教育の現場ではどのように変革が進められているのか、そこに意識やビリーフのずれはないのか、といった問題について把握し、さらに今後の教師のビリーフのあり方について検討することは重要な意味を持つものと考ええる。

本稿では、日本語教師、特に非母語話者日本語教師のビリーフに関する先行研究を、学習経験の変化との関係、新たな教育課程の導入との関係、ICT化社会の中での学習者の変化との関係、教師の成長との関係に焦点を当てて概観し、今後非母語話者日本語教師のビリーフはどうあるべきなのか論じる。

日本語教育の分野では、特に1990年代以降、量的、質的の両面で多くのビリーフ研究が行われてきた。久保田(2013)では、2012年までの日本語教育に関するビリーフの研究を

まとめているが、日本語教師あるいは教育実習生のみを対象とする研究は、量的調査では 11 件、質的調査では 13 件が挙げられている。本稿では、特に非母語話者語日本語教師、またインドネシア人日本語教師のビリーフに焦点を当てて、先行研究を概観する。

2. 学習経験の変化と教師のビリーフ

非母語話者日本語教師は、その多くが学習者として日本語を学んだ経験を持つことが特徴である。本節ではまず、非母語話者日本語教師のビリーフが、自ら学習者として経験した教室活動にどのような影響を受けているのかについて論じた先行研究を概観する。

久保田 (2017) では、ノンネイティブ日本語教師を対象に、2004・2005 年度に実施した調査 (対象者 654 名: 久保田 2007) と 2014・2015 年度に実施した調査 (対象者 386 名) の結果を比較している。調査には BALLI (Beliefs About Language Learning Inventory) (Horwitz 1985, 1987) に修正を加えたビリーフに関する質問紙と、学習経験に関する質問紙を用いている。調査の結果、「10 年の間を置いて、ノンネイティブ日本語教師のビリーフには変化が見られ、全体的には正確さ志向がやや弱くなり、豊かさ志向³がより強い傾向を示すことがわかった。」と述べている。しかし国別に見ると、取り上げた 6 か国の中では、中国、韓国、ベトナム、ロシアでは、正確さ志向が 5% 水準で有意に低くなっているのに対して、インドネシア、タイでは、変化に有意差が見られなかったとしている。しかもインドネシアは、2014・2015 年度調査において、この 6 か国の中で最も正確さ志向の因子下位尺度得点の数値が高い国となっている。この要因はどこにあるのか。インドネシアでは、調査対象者である教師が学習者時代に経験した教室活動についてみたところ、10 年前の結果に比べて、文法・暗記・訳読型に関しては差がないが、コミュニケーション型活動型、作文・報告・ディベート型の経験においては、その因子下位尺度得点が有意に高くなっているという傾向がみられた。特に作文・報告・ディベート型の体験に関して有意差が見られたのは、この 6 か国の中でインドネシアのみであった。文法・暗記・訳読型かコミュニケーション型か、正確さ志向が高いのか低いのかという 2 項対立的な関係ではなく、作文・報告・ディベート型の教室活動とビリーフ形成の関係性についても深く追求すべきことを示しているように考える。教師自身が学習者として経験してきた教室活動に変化が起きていること、それに伴って、教師のビリーフも以前とは変わってきている可能性があることが分かる。

3. 新たな教育課程と教師のビリーフ

では、こうした非母語話者日本語教師が、教師として新たな教育課程や理念と向き合うとき、ビリーフはどのような影響を受けるのであろうか。

新たな教育課程のもと、教師のビリーフがどのように変化したかを調査したものに、星 (2014, 2016) がある。星 (2014) では、韓国中等教育日本語教師 92 名に対して質問紙調

査(44項目)を実施し、2001年度調査(265名)の結果と比較分析している。韓国で2009年に公布され2011年から実施された新たな教育課程が浸透する中、「教師のビリーフは正確さよりも流暢さを優先」する姿が見られるが、「知識伝達者としての伝統的な教師像、翻訳を使用した文型暗記型の学習という一面も見える(p.33)」と述べている。さらに星(2016)では、12名の韓国中等教師を対象にインタビュー調査などの質的調査を行い、その結果を分析している。その結果「教師の実践の語りに現れるビリーフは、教師自身の経験や媒介された社会など異なる源泉をもっており、それが重層的に積み重ねられることが要因であった。その変化はビリーフに多声性をもたらしている(p.89)」と述べ、質的調査によって、量的調査では明らかにできなかった教師のビリーフの複雑さを説明している。新たな教育課程のもと、変化したビリーフと、変化せずに保持されているビリーフがあること、またその要因は単純でないことが示されている。

インドネシアにおける教師に対するビリーフ調査には、小原・栗原(2008)がある。インドネシア人高校日本語教師156名に対して調査を実施し、その結果、「普通高校・宗教高校カリキュラム」の2004年改訂、2006年の一部改訂にも継承されているコミュニケーション重視の考え方を肯定的に受け止めてはいるが、「彼らが好む学習スタイルやコミュニケーションストラテジーには、文法重視の姿勢が見られる。」と指摘している。

松本(2014)は、インドネシアの中等教育の動向をレビューし、中等教育における「日本語」の意義と課題、その課題に対する方策について考察している。前述の2004年の改訂における「能力を基盤とするカリキュラム」という考え方が、教育系大学による新たな教師研究・教師養成制度の開始や、それに伴うPAIKEM(活動的、革新的、創造的、効果的で楽しい学習)、科学的アプローチといった方法論の紹介などを通して、次第に現場の教師にも理解されるようになってきていることを報告している。また、これらの考え方は、OECDの「キー・コンピテンシー」とも通じるものであり、「世界規模での共通の問題・関心事であったと言える」としている。

4. 学習者の変化と教師のビリーフ

前述の通り、教師自身の学習経験の変化、教育課程などの国の方針の改定、新たな教育理念の導入などは、教師のビリーフに何等かの影響を与える。しかし、教師のビリーフに影響を与えるものはそれだけではない。日々教師が向き合っている学習者も変化している。

日本のアニメや漫画が世界中で人気を集めるようになって久しいが(熊野2010)、近年、インターネットの普及により、あらゆる年代の人たちが、日本で見られるものと全く同じものに、そのまま気軽にアクセスすることができるようになった。見られるものも、アニメや漫画に限らず、日本のドラマやバラエティ番組、ニュースやスポーツ中継など、さまざまなジャンルのもものに広がっている。そうした状況の中、日本に興味のある学習者が自らアクセスし、得ているインプットの量は、以前とは比べ物にならないほど多くなってい

る。全く日本語を学習したことがないのに、多くの日本語の単語を知っていたり、日本に関する知識を豊富にもっていたりすることも珍しくない。そのような学習者に対して、教師はどのように対処すべきか、教師としての役割をどう考えるべきなのか、現在、教師のビリーフも大きな影響を受けはじめているようである。

久保田（2019a）では、韓国中等教育レベルの教師6人にインタビューした結果を分析している。その中で、以前に比べて生徒の日本に関する情報量が全般的に増えたこと、さらにその量や質に学習者間で差があることが述べられ、そこには、「教師としての存在意義に関わる意識の葛藤」も見られたと述べている。ある教師は、20年前の生徒は、自分の話が全て初めて聞く話であったが、今の生徒はそうじゃない顔をしている。昔はそばの食べ方なども詳しく教えたが今はしない。「もう私たちの周りに日本文化があふれている。歌とか食べ物とか」と述べている。そして、この事実に対してとても困惑している様子を示している。一方、それを十分認識しながらも、そのような学習者がいる場合、「生徒がもっと詳しく知っていたら、生徒を発表させて、私もその情報を聞いたりしています」と述べる教師もいた。学習者の変化に対して、それでも「教師は学習者よりも知識がなければならない」「教師は新しいことを教えなければならない」というビリーフを持ち続け悩む教師と、学習者のほうが知識が豊富であることを認め、「学習者に新しい情報を提供させる」という方法をとる教師に分かれているように思われる。

5. 教師の成長とビリーフの変化

新たな教育課程、学習者の変化など、様々な変化の中で、教師自身はどう対処すべきなのだろうか。そのような変化の中、教師は自ら考え、時には自らの教授観と向き合い、対処していく能力が必要であろう。前述の通り、ビリーフは様々な要因のもと、変化する部分と変化しない部分があると言われる。久保田（2019b）では、一人の非母語話者日本語教師を5年10か月にわたり縦断的に調査した結果をもとに、その教師が、様々な経験を通して成長し、ビリーフを変えていく様子を報告した。特に教師の役割に関しては、最初の2年ほどの間は、良い授業をすること、十分な準備をすることが重要であると考えていたが、その後、教師研修や課題遂行型の教科書の使用、学習者が自律的に学ぶ姿を見るなどの経験を通して、学生を待つ、自律学習を促す、教師は自分をコントロールする、全部教えずに気づかせる、といった考え方に变化していることがわかったとしている。それは、上から指示されて受身的に変化させたものではなく、自らが様々な経験を通して「ものの見方」を変化させ、その結果生じた変化であった。5年という時間はかかっても、「ものの見方」を変化させ、教師として成長することができることを物語っている。ビリーフの真の変化は、こうした「ものの見方」の変化が教師の成長と共に生じることで起こるものであると述べている。

6. まとめ

今後、ますます ICT 化が進み、学習者の知識が、偏りはあっても、ある点では教師を超えたものになることが予想される。また新しい教育方針のもと、教師は学習者に対して、単純に「日本語」や「日本」に関する知識を与えれば良いのではなく、「日本語」の学習を通して、学習者の「能力」の育成や向上を目指さなければならない。このような状況の中で、教師の役割はどうあるべきなのか。それは主導的な立場をもつ「教える」教師ではなく、学習者が自律的に学び、成長することを支える姿勢をもつ教師を目指すことなのではないだろうか。そうした姿勢をもつためには、教師自身も、自律的に考え、自らを振り返る力を持ち、時には柔軟に「ものの考え方」を変化させ、柔軟で偏りのないビリーフを持つ必要があるものと考えられる。

参考文献

小原亜紀子・栗原明美（2008）「インドネシアにおける高校日本語教師研修に関する一考察」『国際交流基金日本語教育紀要』4, pp.27-40.

久保田美子（2007）「ノンネイティブ日本語教師のビリーフの研究」明海大学大学院博士後期課程応用言語学研究科応用言語学専攻・2006年度博士（応用言語学）論文.

久保田美子（2013）「第二言語習得とビリーフ」『日本語教育叢書 第三部』中国中央教育出版, 121-158.

久保田美子（2017）「ノンネイティブ日本語教師のビリーフと学習経験—2004・2005年度と2014・2015年度の量的調査結果の比較—」『国際交流基金日本語教育紀要』13, pp.7-22.

久保田美子（2019a）「言語教師ビリーフの調査項目の見直し—韓国中等教育日本語教師へのインタビュー調査から—」『水谷信子記念日本語教育論集』第2号.

久保田美子（2019b）「非母語話者日本語教師のビリーフの変化と成長過程—縦断的インタビュー調査の結果から—」『日本語教育』172, pp.73-87.

熊野七絵（2010）「日本語学習者とアニメ・マンガ～聞き取り調査結果から見える現状とニーズ～」『広島大学留学生センター紀要』20, 89-103.

国際交流基金日本語国際センター（2015）『和文報告書 21世紀の人材育成をめざす東南アジア5か国の中等教育における日本語教育—各国教育文書から見える教育のパラダイムシフト—』独立行政法人国際交流基金日本語国際センター.

星摩美（2014）「日本語教師の持つビリーフの要因と変化に関する縦断的研究：質問紙調査結果に見る韓国中等教育における国家シラバス『教育課程』と日本語教師のビリーフ」『人間社会環境研究』28, pp.37-55.

星摩美 (2016) 「韓国中等教育日本語教師の実践

とビリーフー変化とその要因を中心にー」『日本語教育』165, pp.89-103.

松本剛次 (2014) 「インドネシアの中等教育改革がめざす『能力 (コンピテンシー) 』とその育成」『日本語教育』158, pp.97-111.

Clark, C. M., and Peterson, P. L. (1986).

Teachers' thought processes. In M. C. Wittrock (Ed.). *Handbook of Research on Teaching*, 3rd ed. pp.255-296 New York; Macmillan.

Horwitz E. K, (1985). Using Students Beliefs about Language Learning and Teaching in the Foreign Language Methods Course. *Foreign Language Annals*, 18, 4, 333-340.

Horwitz E. K, (1987). Surveying Students Beliefs About Language Learning. In A.Wenden & J.Rubin (Eds.) *Learner Strategies in Language Learning*. (pp.119-129).London: Prentice-Hall.

注

1: 本稿では, Clark and Peterson(1986)で教師の思考と行動のモデル図の中で示されている Teachers' Theories & Beliefs, つまり教師の思考過程を形作る要素のうち, その場の反応ではなく, それまでの経験や知識などの蓄積から形づくられる考え方や信念の部分を「ビリーフ」と呼ぶ。

2: 国際交流基金日本語国際センター (2015) では, 東南アジア 5 か国においても「キーコンピテンシー (Key Competencies)」や「21 世紀型スキル (21st Century Skills)」といった新たな能力概念が教育課程やガイドラインに組み込まれていることを示している。

3: 久保田 (2006) では, ノンネイティブ日本語教師に対するビリーフアンケート調査の結果から「正確さ志向」と「豊かさ志向」の 2 つの因子を抽出し, 「正確さ志向」は「言語の構造や発音の面での『正確な』産出をめざし, そのために授業では文法の詳しい知識を与え, 練習においても正確さを求め, 学習量を重視し, 教師自身にもできるだけネイティブに近い『正確さ』を求める傾向がある」とし, 「豊かさ志向」は「ことばの知識を教科書どおりに与えるのではなく, ことばの背景にある文化を重要と考え, 教養としての日本語の学習, ことばを学ぶことやコミュニケーションの楽しさを学習者自身に体験させることを重要だと考える傾向がある」と定義している。